

第2章

勝山市の現状と将来見通しからみた都市構造上の課題

2-1 生活サービス施設の不足

(1) 人口の動向

1) 市全体の人口、人口構造の動向

本市の人口は、1955（昭和 30）年頃から一貫して減少傾向を続けており、1980（昭和 55）年の 30,852 人から 2020（令和 2）年の 22,150 人へと 40 年間で 8,702 人（28.2%）減少しています。

年齢 3 区分別の推移は、15 歳未満の年少人口及び 15～64 歳の生産年齢人口が減少し続ける一方、65 歳以上の老年人口は、増加の一途を辿っています。2020（令和 2）年の人口構造は、年少人口が 11.2%、生産年齢人口が 51.3%、老年人口が 37.5%となっています。

人口の推移を周辺市町と比較すると、本市と大野市のみが 40 年前から人口減少傾向が継続しています。

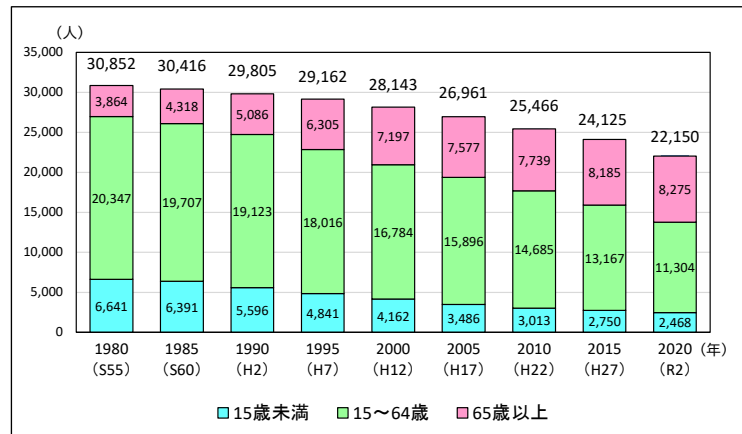


図 2-1 総人口及び年齢 3 区分人口の推移
（資料：1980（昭和55）年～2020（令和 2）年国勢調査）

※年齢 3 区分人口は年齢不詳含まず、総人口は年齢不詳を含んでいるため、合計値は一致しない。

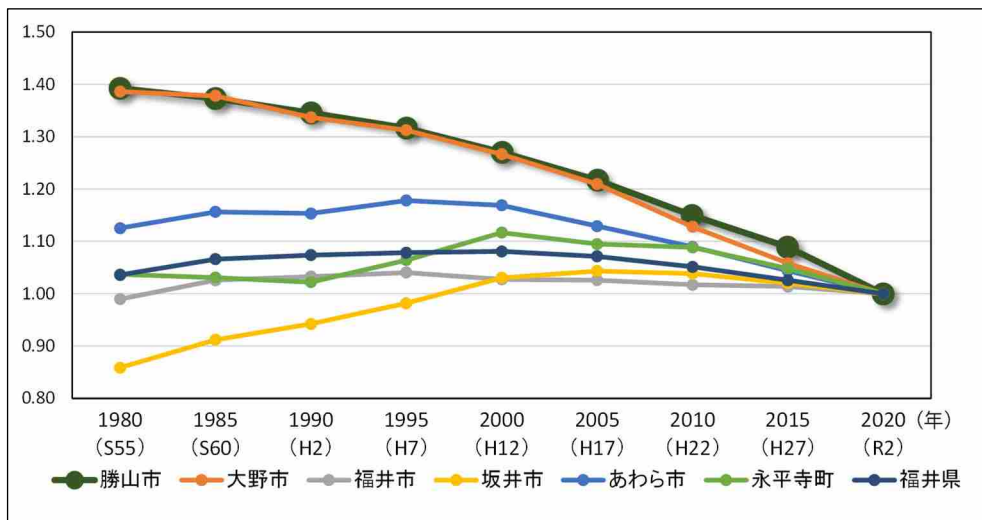


図2-2 周辺市町における人口変動の比較（2020年を1.0とする）
（資料：1980（昭和55）年～2020（令和 2）年 国勢調査）

2) 市全体の世帯数の動向

本市の世帯数は、1980（昭和 55）年から 1995（平成 7）年までほぼ横ばいに推移し、その後、2005（平成 17）年までの 10 年間は増加傾向を示しましたが、2005（平成 17）年以降は、減少に転じており、2020（令和 2）年は、7,524 世帯となっています。

1 世帯当たりの人口（世帯人員）は、一貫して減少傾向が続いており、2020（令和 2）年は 2.94 人/世帯となっています。

総人口が減少する中、世帯分離等により横ばい又は増加してきた世帯数ですが、2005（平成 17）年以降は後継者の不在等により、減少傾向となっています。

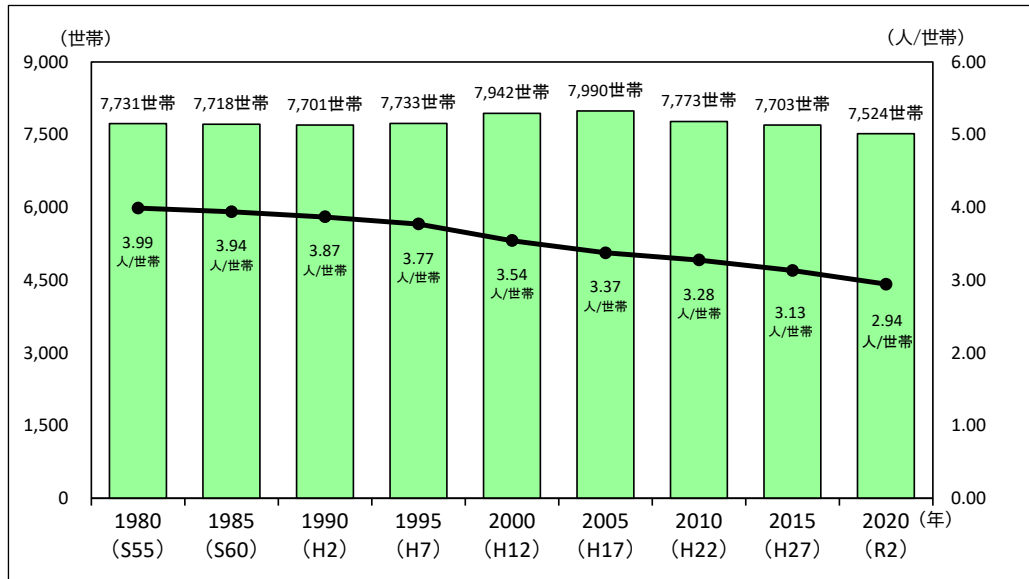


図2-3 世帯数及び世帯人員の推移
 (資料：1980（昭和55）年～2020（令和2）年 国勢調査)

3) 地域別人口増減率

市街地の外延部では、2000（平成12）年から2020（令和2）年の20年間で人口が増加しています。市街地中心部や九頭竜川の左岸、郊外部では人口が減少しています。

2040（令和22）年時点の将来予測では、これまで増加していた地域も含め、市全域で人口が減少し、特に市街地中心部と郊外部で減少率が30%を超えます。

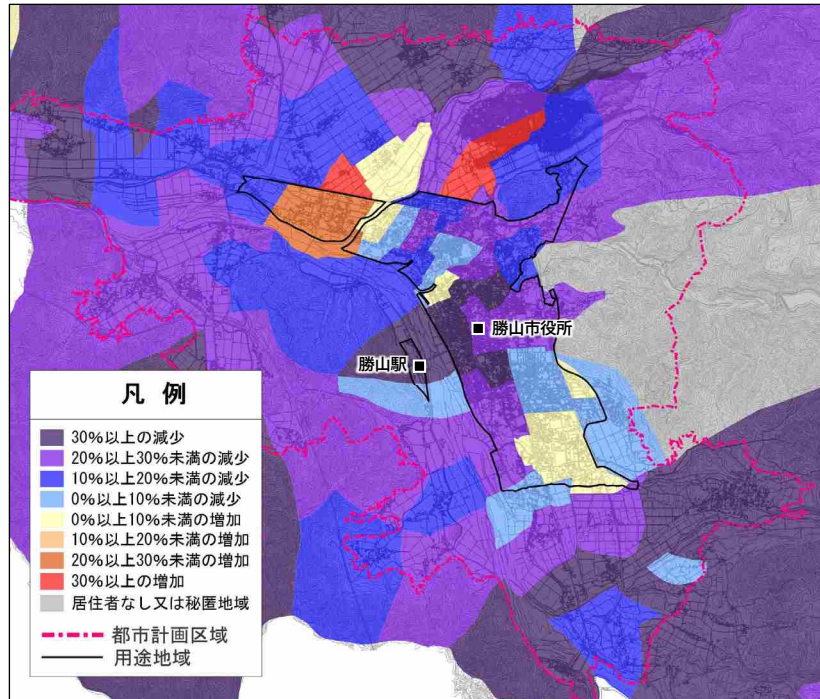


図 2-4 地域別人口増減率（2000（平成12）年～2020（令和2）年）
（資料：2000（平成12）年、2020（令和2）年 国勢調査）

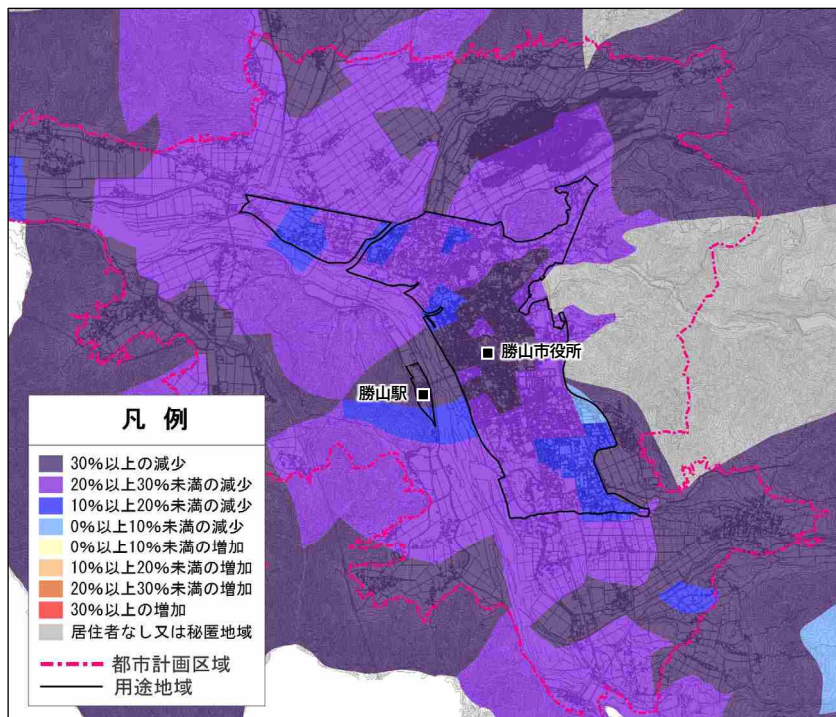


図 2-5 地域別人口増減率（2020（令和2）年～2040（令和22）年）
（資料：2020（令和2）年国勢調査、2040（令和22）年推計値）

※推計条件：国立社会保障・人口問題研究所が2023（令和5）年に推計した勝山市の将来人口及び2020（令和2）年の地域別の男女別5歳別人口からコホート要因法により推計

(2) 高齢化の状況

1) 高齢化の動向

本市の高齢化率は一貫して上昇しており、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2040（令和22）年には44.4%に達する見込みです。

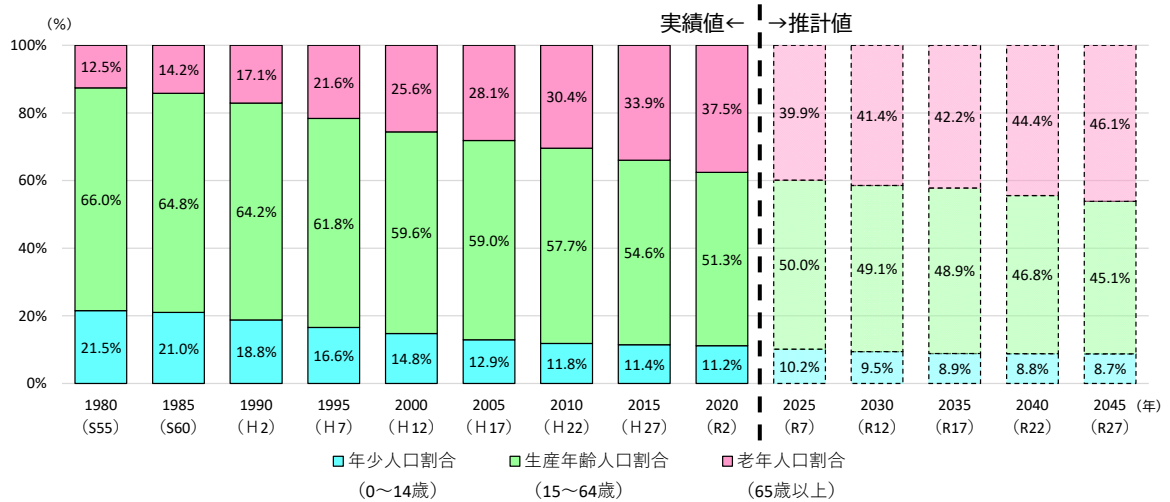


図 2-6 年齢3区分別割合の推移（1990（昭和55）年～2045（令和27）年）

（資料：2020（令和2）年までは国勢調査結果、2025（令和7）年からは国立社会保障・人口問題研究所が2023（令和5）年に推計した勝山市の将来の年齢3区分人口）

2) 地域別高齢化率

2020（令和2）年時点の高齢化率は、市街地中心部及び郊外地域において40%を超える高い水準となっています。

2040（令和22）年時点の将来予測では、さらに高齢化が進展し、ほとんどの地域が高齢化率30%を超える状況となります。全体的に郊外部において高齢化がより進む傾向にありますが、中心部の栄町1丁目、本町2丁目、本町4丁目、元町1丁目、芳野町1丁目においては高齢化率50%を超える推計結果となります。

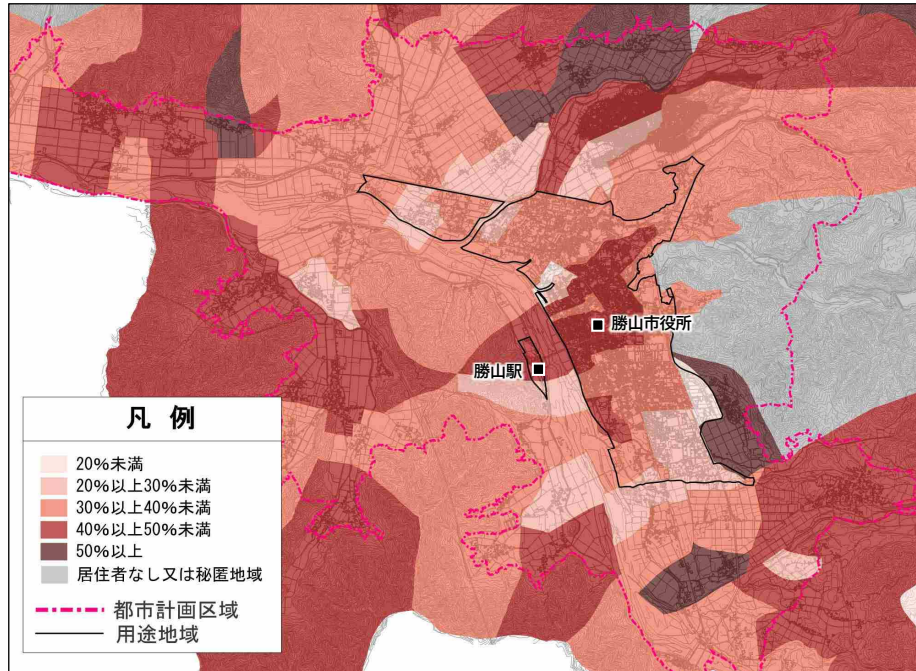


図 2-7 地域別高齢化率（2020（令和2）年）

（資料：2020（令和2）年 国勢調査）

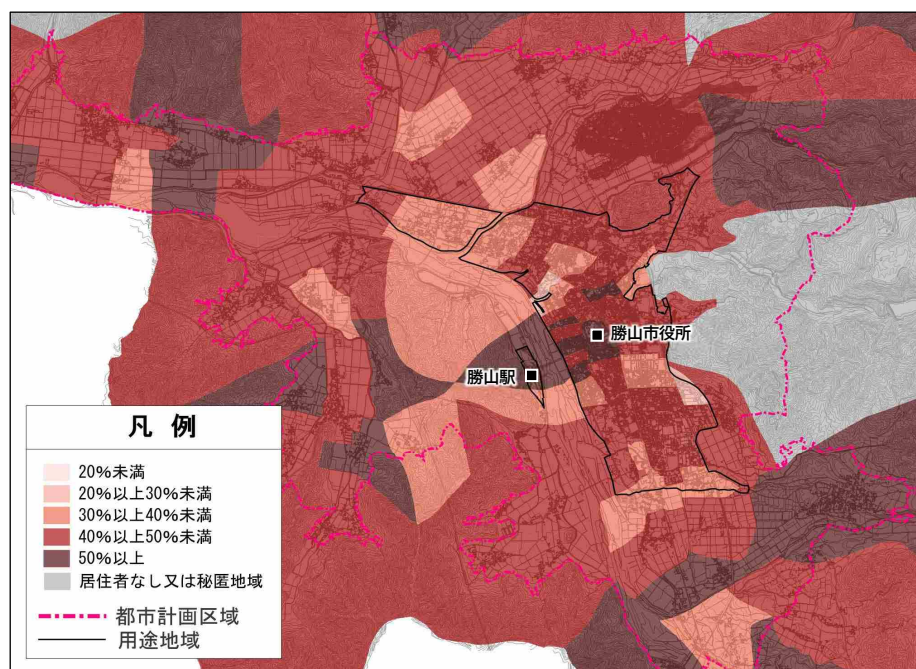


図 2-8 地域別高齢化率（2040（令和22）年）

（資料：2040（令和22）年推計値）

※推計条件：国立社会保障・人口問題研究所が2023（令和5）年に推計した勝山市の将来人口及び2020（令和2）年の地域別の男女別5歳別人口からコーホート要因法により推計

(3) 人口集中地区(DID)の状況

1) 人口集中地区(DID)の動向

1980（昭和 55）年以降における人口集中地区（D I D）の人口は、1985（昭和 60）年から 1990（平成 2）年にかけて一時的に増加したのを除き、減少傾向を続けています。40 年間で 12,820 人から 9,027 人へと 3,793 人（29.6%）減少しており、減少率は、市全体の総人口の減少率 28.2%を若干上回っています

人口集中地区の人口密度は、1980（昭和 55）年の 53.4 人/ha から 2020（令和 2）年の 30.3 人/ha へと 43.3%低下しており、人口が減る一方で区域は拡大していることから、人口の減少率を上回るペースで密度が低下しています。

人口集中地区の区域は、1980（昭和 55）年から 2015（平成 27）年は、主に北部及び南東部の土地区画整理事業実施区域が拡大し、240ha から 295ha へと 55ha（22.9%）拡大となりました。その後、2015（平成 27）年から 2020（令和 2）年では、北西部が縮小した一方で、北東部の県立勝山高校周辺が拡大し、295ha から 298ha へと 3ha（1.0%）広がっています。

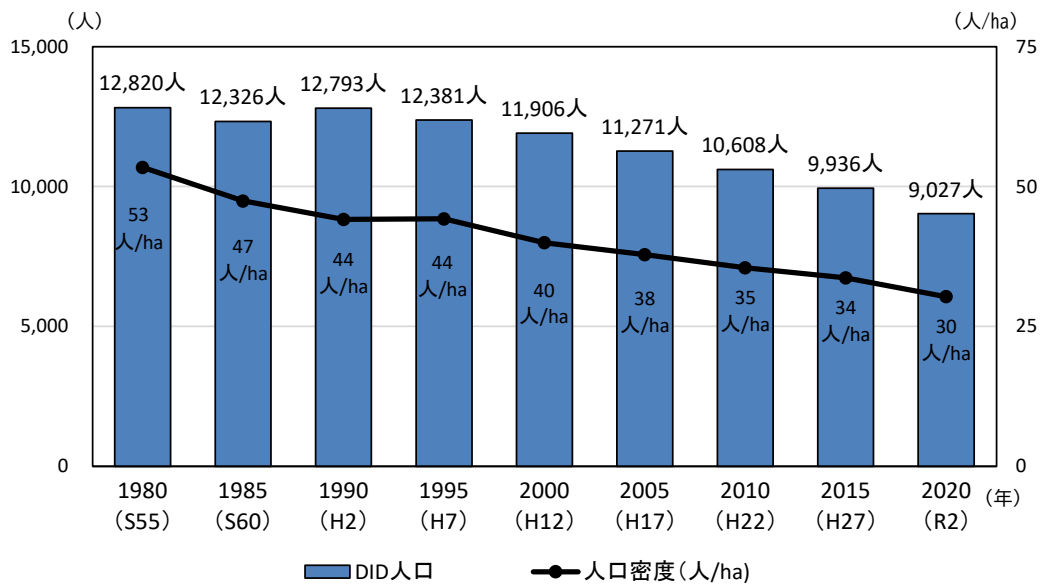


図 2-9 人口集中地区の人口及び人口密度の推移
 (資料：1980（昭和55）年～2020（令和 2）年 国勢調査)

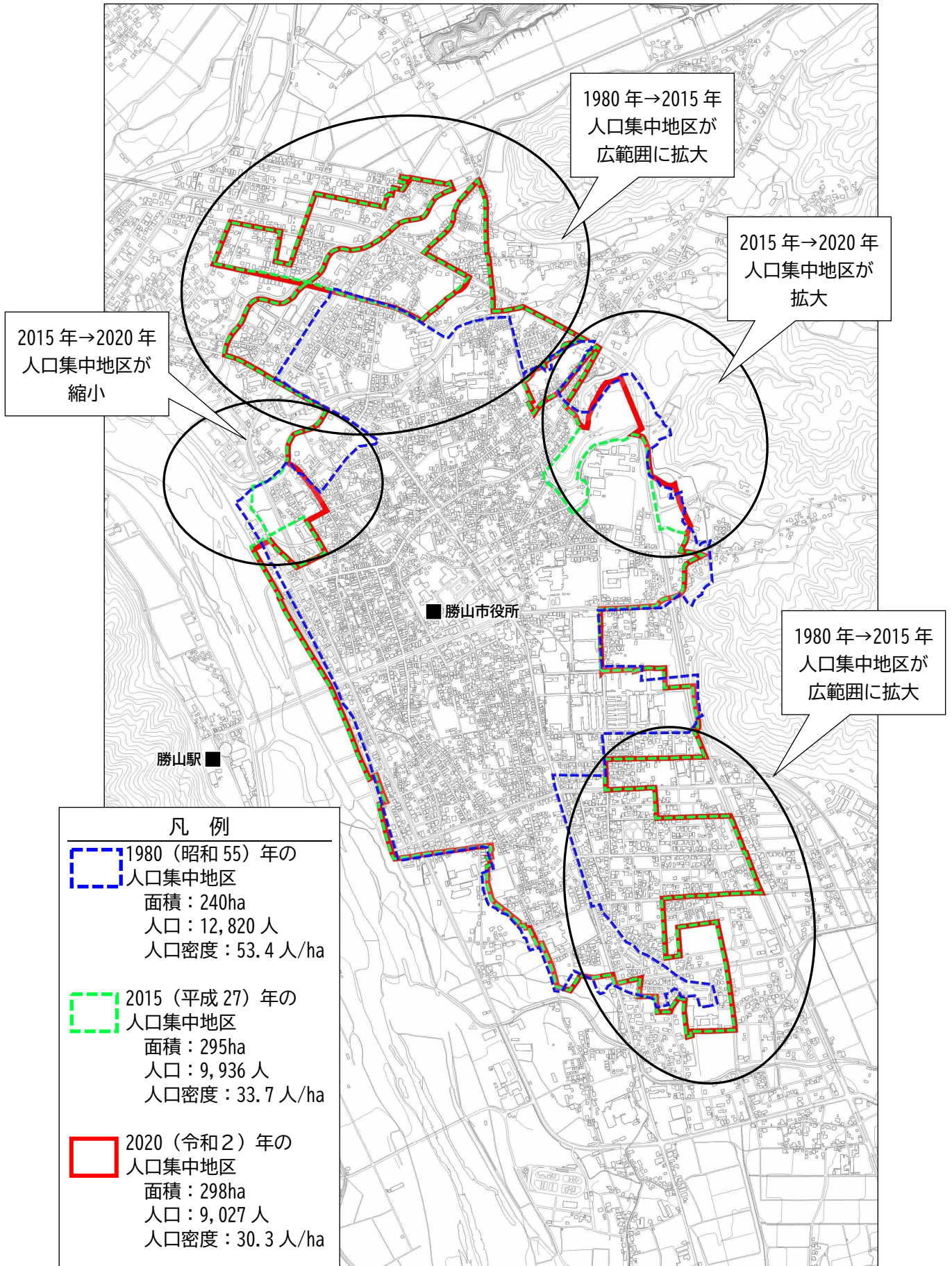


図 2-10 人口集中地区 (DID) の変遷

(資料：1980 (昭和 55) 年、2015 (平成 27) 年、2020 (令和 2) 年 国勢調査)

2) 地域別人口密度

2020（令和2）年時点で最も人口密度が高いのは、沢町2丁目で46.2人/haとなっています。人口密度が20人/ha以上の地域は、全て用途地域内に含まれており、用途地域の外縁部は20人/ha未満となっています。

2040（令和22）年時点の推計結果では、最も人口密度が高い沢町2丁目でも32.2人/haに低下するなど、全体的に人口密度が低下しています。

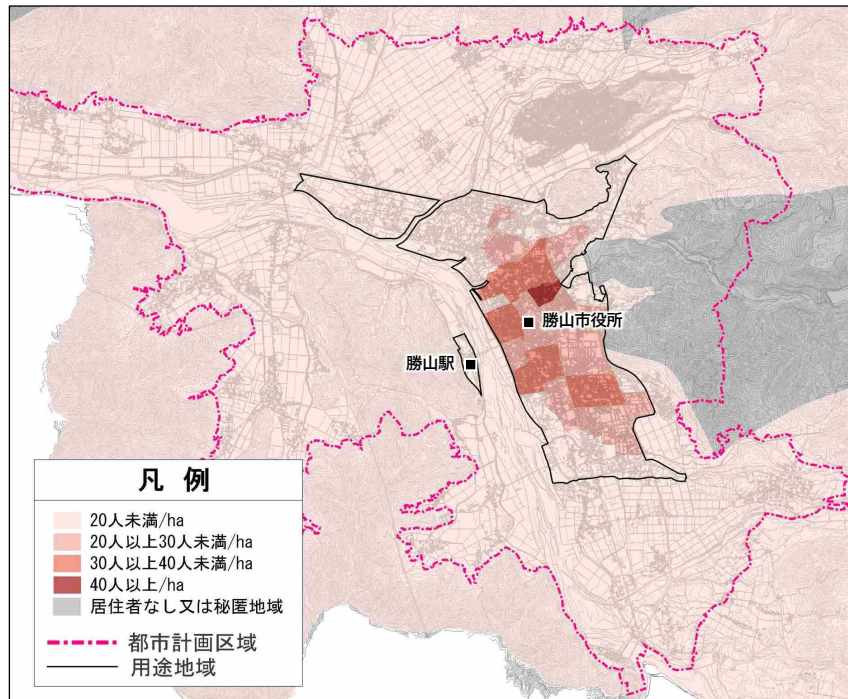


図 2-11 地域別人口密度（2020（令和2）年）

（資料：2020（令和2）年 国勢調査）

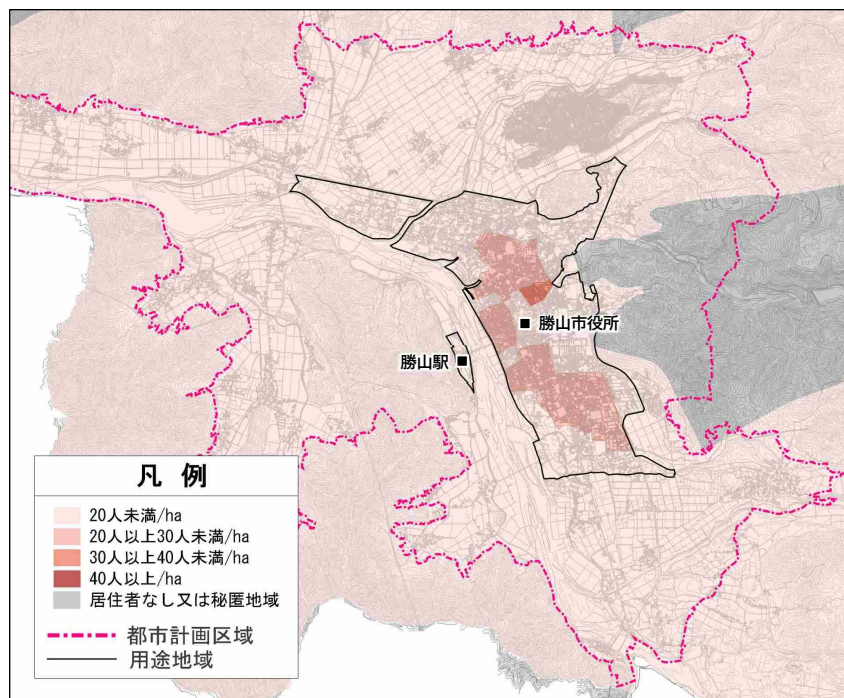


図 2-12 地域別人口密度（2040（令和22）年）

（資料：2040（令和22）年推計値）

※推計条件：国立社会保障・人口問題研究所が2023（令和5）年に推計した勝山市の将来人口及び2020（令和2）年の地域別の男女別5歳別人口からコーホート要因法により推計

(4) 生活サービス施設の状況

1) 生活サービス施設の状況

生活サービス施設（「医療施設」「高齢者施設」「商業施設」「子育て支援施設」）の多くは用途地域内（特に中心市街地）に立地し、そのほとんどの施設がバス路線又は近接していることから、郊外部からもアクセスしやすい状況にあります。

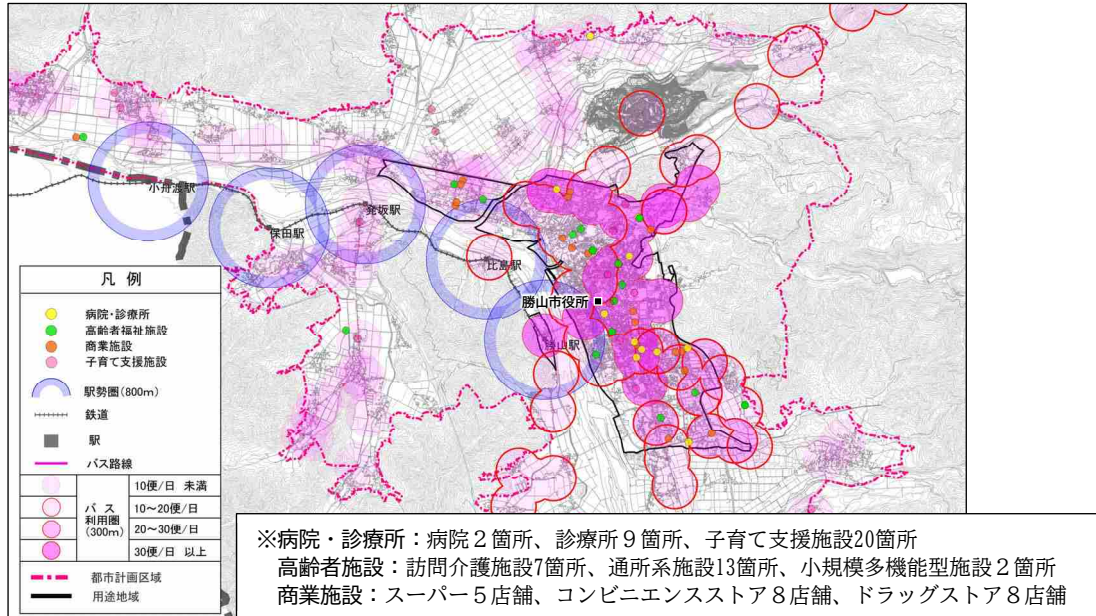


図 2-13 交通のサービス水準と生活サービス施設分布状況

(資料：勝山市地域公共交通計画、iタウンページ、2020（令和2）年国土数値情報、庁内資料)

郊外部だけでなく、用途地域内においても人口が減少する区域があり、生活サービス施設の利用者がさらに減ることが考えられます。

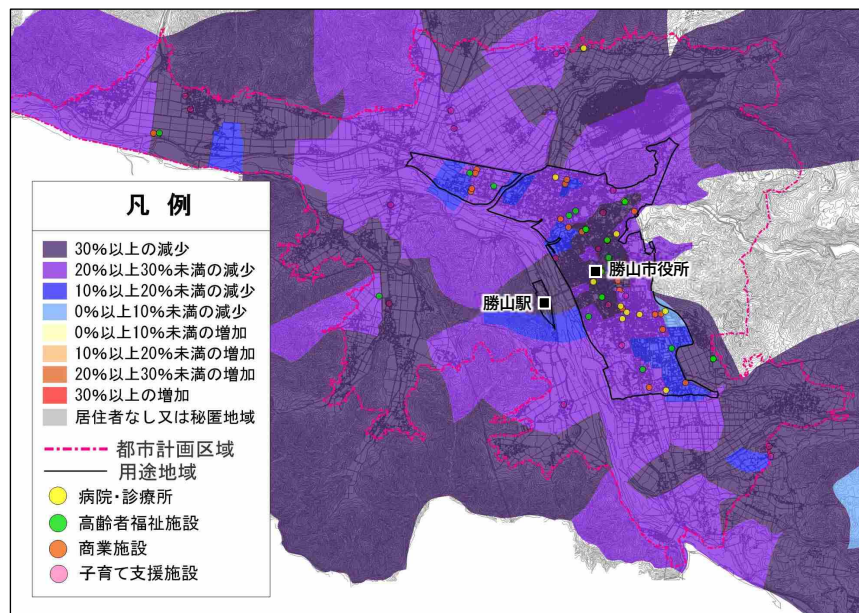


図 2-14 生活サービス施設の立地状況と人口増減（2020（令和2）年～2040（令和22）年）

(資料：2020（令和2）年国勢調査、2040（令和22）年推計値、iタウンページ、2020（令和2）年国土数値情報、庁内資料)

<問題・課題>

○郊外部だけでなく用途地域内においても高齢化や人口密度の低下が進行し、人口減少が続いていることから、生活サービス施設の利用者が減少し、施設の撤退等により市民の生活利便性を維持することが難しくなります。

2-2 公共交通機関のサービス水準の低下

(1) 公共交通サービス水準の状況

市内には、コミュニティバス 10 路線及び広域路線バス 1 路線が運行しています。多くの路線が停車する勝山駅、福井勝山総合病院を中心に、サービス水準の高い区域が用途地域内に連なっています。

また、デマンドバスとして「北郷予約便」、「荒土・野向予約便」、「平泉寺・猪野瀬予約便」を導入し、利用者のニーズに応じた運行を行っています。

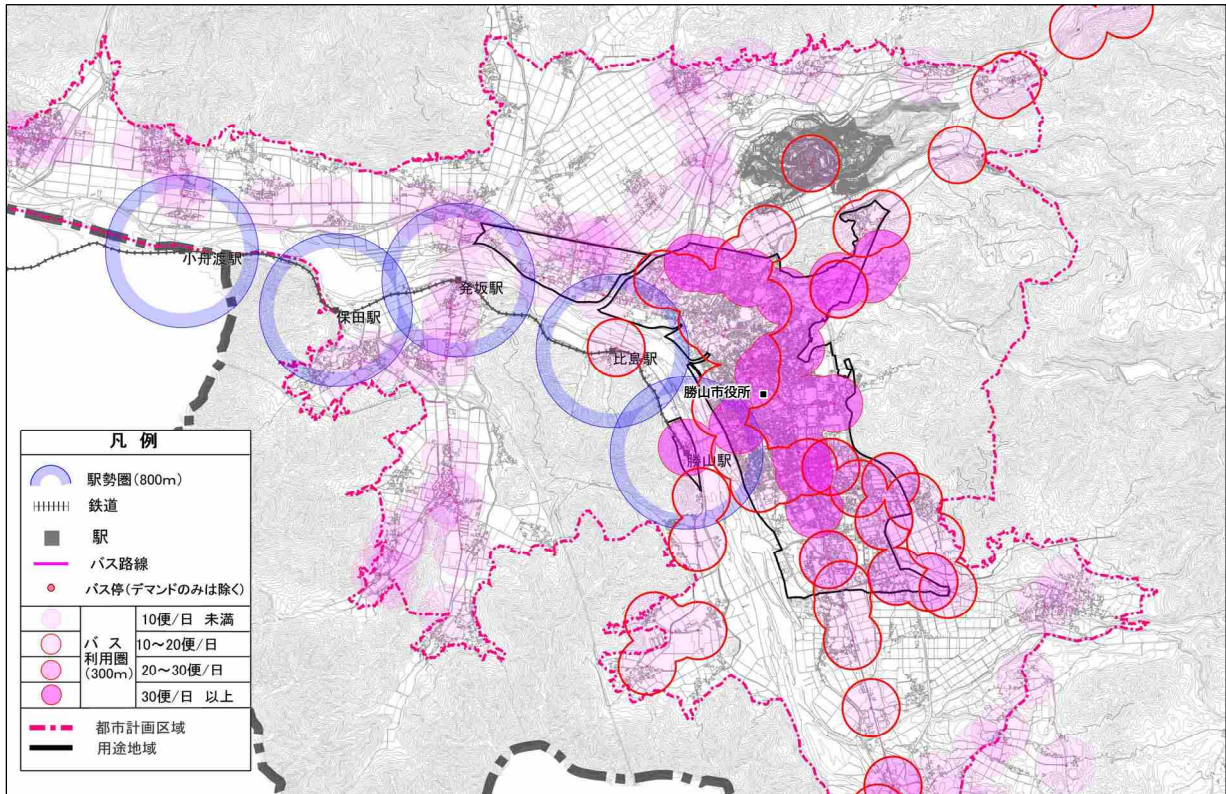


図 2-15 交通のサービス水準の状況
(資料：勝山市地域公共交通計画)

(2) コミュニティバス等の利用状況

市が運営するコミュニティバスは、勝山駅や福井勝山総合病院などの市内の主要施設を経由して、市内各地域に放射状に延びています。いずれも2020（令和2）年度には新型コロナウイルス感染症の流行に伴う外出規制等の影響とみられる減少となりましたが、その後、ほとんどの路線で回復傾向が見られます。「北郷予約便」のみが減少傾向となっています。

また、市内バスを活用して観光が楽しめるように、市内観光バス「ダイナゴン」や恐竜博物館直通バスを運行しています。2022（令和4）年度には、ダイナゴンは約1,500人、2016（平成28）年度4月に運行を開始した恐竜博物館直通バスは、約37,000人が利用しています。

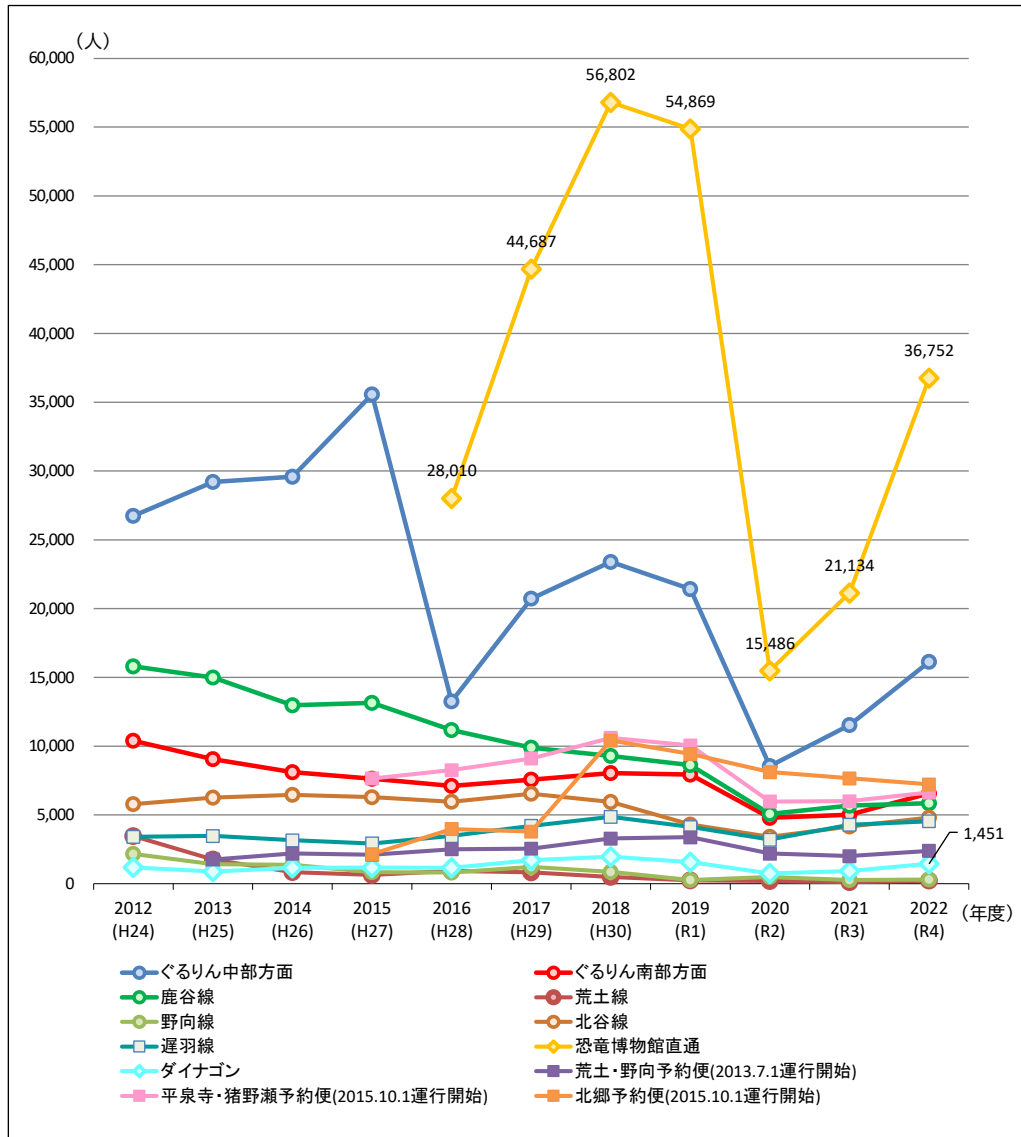


図 2-16 バス利用者数の推移
(資料：勝山市地域公共交通計画、庁内資料)

<問題・課題>

- 人口減少によって利用者が減ることになり、鉄道・路線バス・コミュニティバス・デマンド交通等の公共交通のサービス水準の低下が懸念されます。
- 公共交通のサービス水準が低下することで、郊外に住む市民が市街地内の病院や生活サービス施設を利用することが難しくなります。
- 観光客にも公共交通を利用してもらえるよう、公共交通の活用しやすい環境整備が必要です。

2-3 地域コミュニティの衰退

(1) 人口の動向と将来の見通し

市の基盤となっている1町9ヶ村から引き継がれてきた現在の10地区において、地域住民が主体となって地区の個性や魅力を生かした活動を活性化し、特色ある地域づくりを推進しています。

本市の人口は、1950（昭和25）年の38,962人から減少し続けており、2020（令和2）年10月の国勢調査の結果では、22,150人となっています。

将来の人口については、2030（令和12）年に19,272人と20,000人を割り込み、その後2040（令和22）年には16,339人まで減少する（人口ビジョンの推計値）と見込まれています。

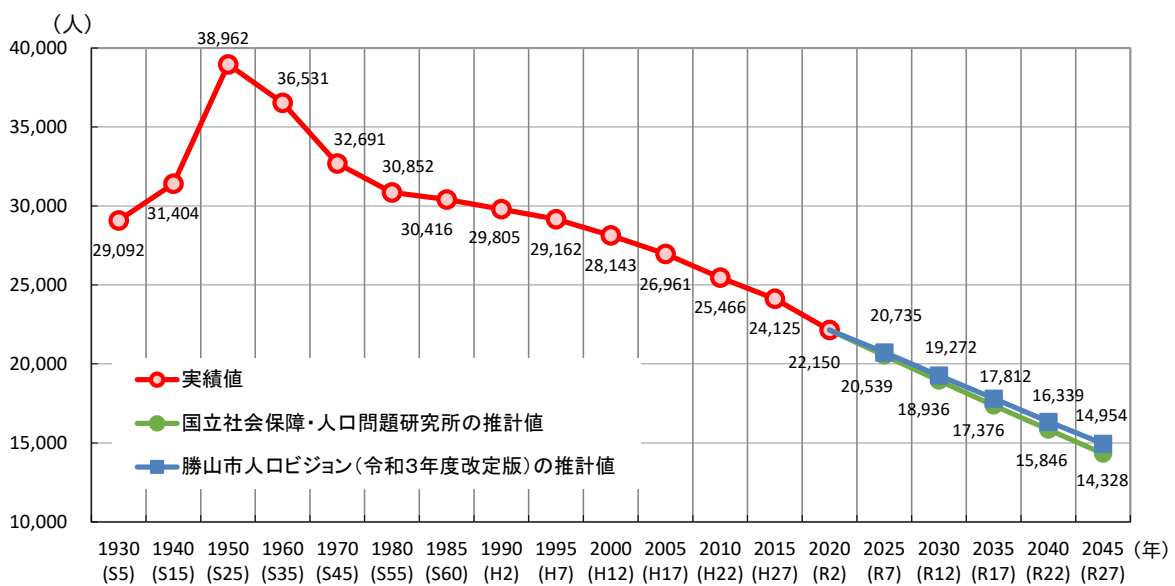


図 2-17 人口推移と将来推計（1930（昭和5）年～2045（令和27）年）

（資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」、勝山市人口ビジョン）

毎年 500～700 人程度の転出が続いており、これは就職・転勤等のほか、各歳別人口の増減をみると、大学進学のために多くの若者が本市を離れる状況がうかがえます。

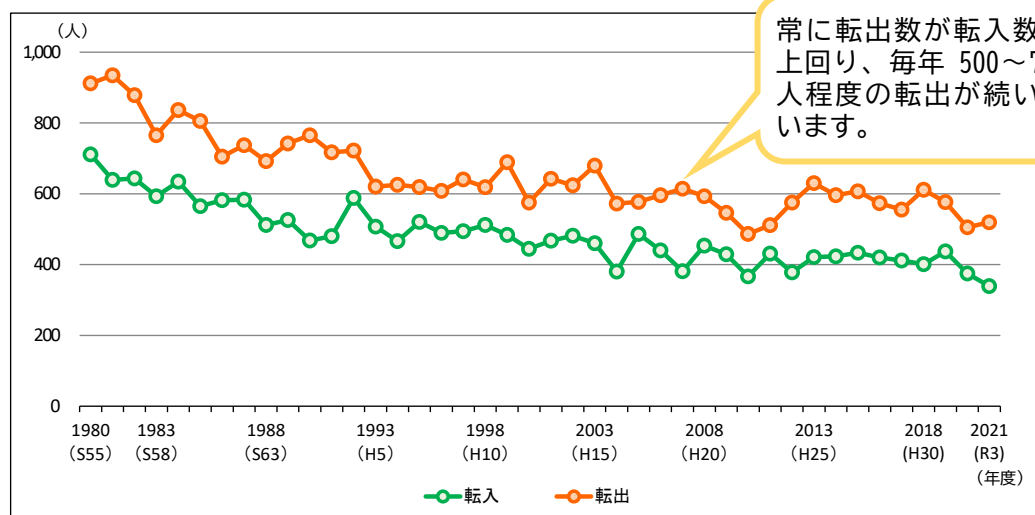


図 2-18 転出・転入数の推移（1980（昭和55）年度～2021（令和3）年度）

（資料：勝山市統計書）

(2) 高齢者人口・世帯数の状況

現在増加している高齢者数は、将来的には減少する予測となっておりますが、支える世代である生産年齢人口の減少率が、高齢者数の減少率を上回るため、生産年齢人口に対する高齢者数の割合は、2020（令和2）年の73.2%から2040（令和22）年には94.8%へと約18.6ポイント高まることとなります。

表 2-1 勝山市の高齢者等の増加の見通し

項目	実績（国勢調査）			推計値（日本の地域別将来推計人口）			
	2005 （平成17）年	2015 （平成27）年	2020 （令和2）年	2025 （令和7）年	2030 （令和12）年	2035 （令和17）年	2040 （令和22）年
高齢者数	7,577	8,185	8,275	8,190	7,847	7,333	7,033
後期高齢者数	4,057	4,524	4,339	4,706	4,989	4,923	4,619
総人口	26,961	24,125	22,150	20,539	18,936	17,376	15,846
生産年齢人口	15,896	13,167	11,304	10,261	9,297	8,502	7,418
生産年齢人口/ 総人口	59.0%	54.6%	51.3%	50.0%	49.1%	48.9%	46.8%
高齢者数/ 生産年齢人口	47.7%	62.2%	73.2%	79.8%	84.4%	86.3%	94.8%

資料：2020（令和2）年までは国勢調査結果、2025（令和7）年からは国立社会保障・人口問題研究所が2023（令和5）年に推計した勝山市の将来人口

総人口だけでなく総世帯数も減少する局面に入っていますが、高齢者単身世帯数、高齢夫婦世帯数は増加傾向が続いています。2022（令和4）年4月現在で高齢単身世帯数と高齢夫婦世帯数の合計は、総世帯数の29.1%を占めており、市内の3世帯に1世帯近くが高齢者のみの世帯となっています。

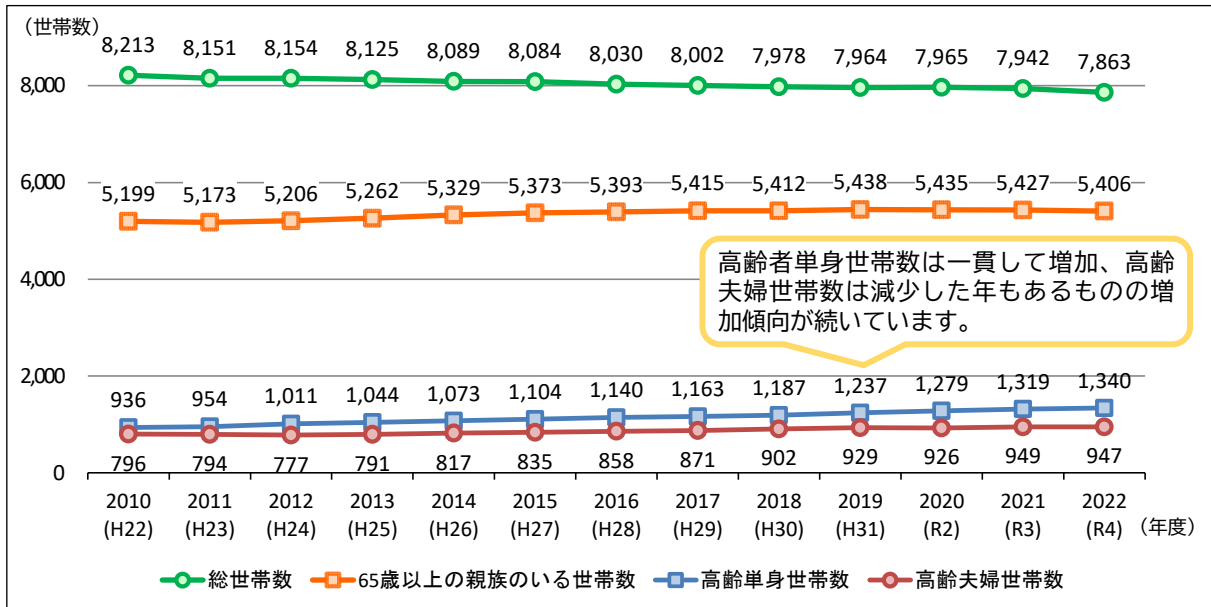


図 2-19 高齢者のいる世帯数の状況（2010（平成22）年度～2022（令和4）年度）
（資料：高齢者福祉基礎調査（4月1日時点の推計）※国勢調査の世帯数の値とは異なる。）

<問題・課題>

○人口減少や少子高齢化により、地域コミュニティの担い手が不足することで、次世代の育成や高齢者世代への目配り、環境美化、伝統文化の伝承など、地域コミュニティの機能が発揮できない状態になり、地域での安心・安全な暮らしが難しくなります。

2-4 高齢者の暮らしに即した適切な対応

国立社会保障・人口問題研究所が 2023（令和 5）年に推計した勝山市の将来推計人口では、2040（令和 22）年には本市の高齢化率は 44.4%に達する見込みです。

「地域別高齢化率（2040（令和 22）年）」をみると、郊外部だけでなく全体的に高齢化が進展し、ほとんどの地域が高齢化率 30%を超えています。特に中心部の栄町 1 丁目、本町 2 丁目、本町 4 丁目、元町 1 丁目、郡町 2 丁目、芳野町 1 丁目においては高齢化率が 50%を超えることが推計されています。

平均寿命と健康寿命の差は、2021（令和 3）年度で男性は 1.5 歳、女性が 3.3 歳となっており、この期間が要介護状態である期間と考えられます。健康寿命※は、2016（平成 28）年度と比べると、男性は 1.1 歳、女性は 0.2 歳延びています。

※健康寿命の定義について、福井県は「要介護 2 以上が健康でない期間」としているため、国（要支援 1 以上が健康でない期間）が算出した値とは異なります。

2022（令和 4）年度介護予防・日常生活圏域ニーズ調査結果から、本市の高齢者は健康状態が「よい」と考える方が 7 割を超えており、生きがいについては、「趣味や娯楽」「働くこと」「家族との団らん」「旅行」「地域での活動やボランティア」など、高齢になっても生きがいを持ちながら活発に行動する方も多いことがうかがえます。

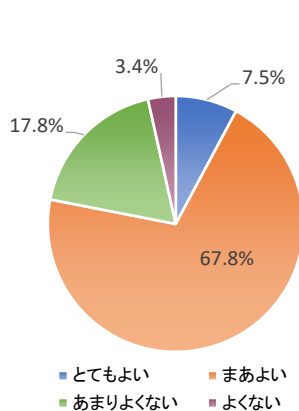


図 2-20 健康状態

（資料：2022（令和 4）年度介護予防・日常生活圏域ニーズ調査結果）

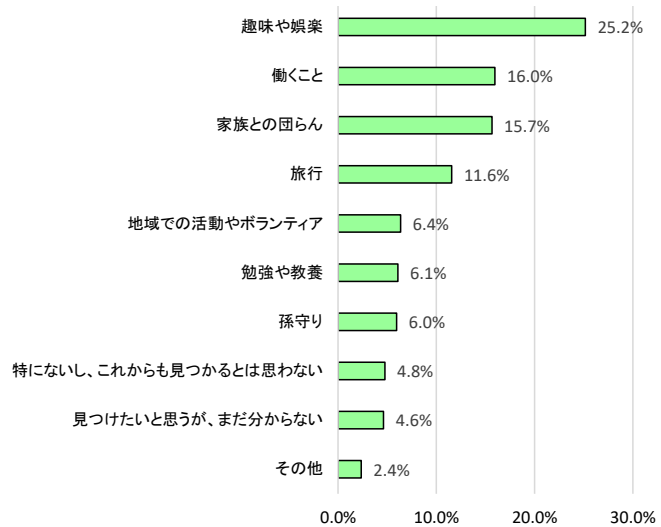


図 2-21 生きがい

<問題・課題>

- 本市では、車社会が根付いており、自家用車利用を中心とした生活スタイルが主体となっているため、自ら運転できない高齢者になった場合や家族のサポートを受けづらくなった場合等に、買物や通院に支障をきたすことが想定されます。
- 高齢者のニーズ調査の結果からは、高齢者になった後も「趣味や娯楽」「働くこと」に生きがいを感じている人が多いため、高齢者の行動を支える環境の整備・確保が必要になります。

2-5 まちなかの空洞化

(1) 中心市街地の状況

中心市街地には市立図書館や市民会館、教育会館など市民が利用する施設が立地しており、学習する機会、芸術や地域の伝統、文化に触れる機会を提供しています。

中心市街地では、多くの本数が停車するバス停が集中し、郊外の集落とも公共交通機関で連絡されています。

一方で、土地利用状況を見ると、空き地等の「都市的未利用地」がまちなかに数多く点在しており、まちなかの空洞化が進んでいる状況となっています。

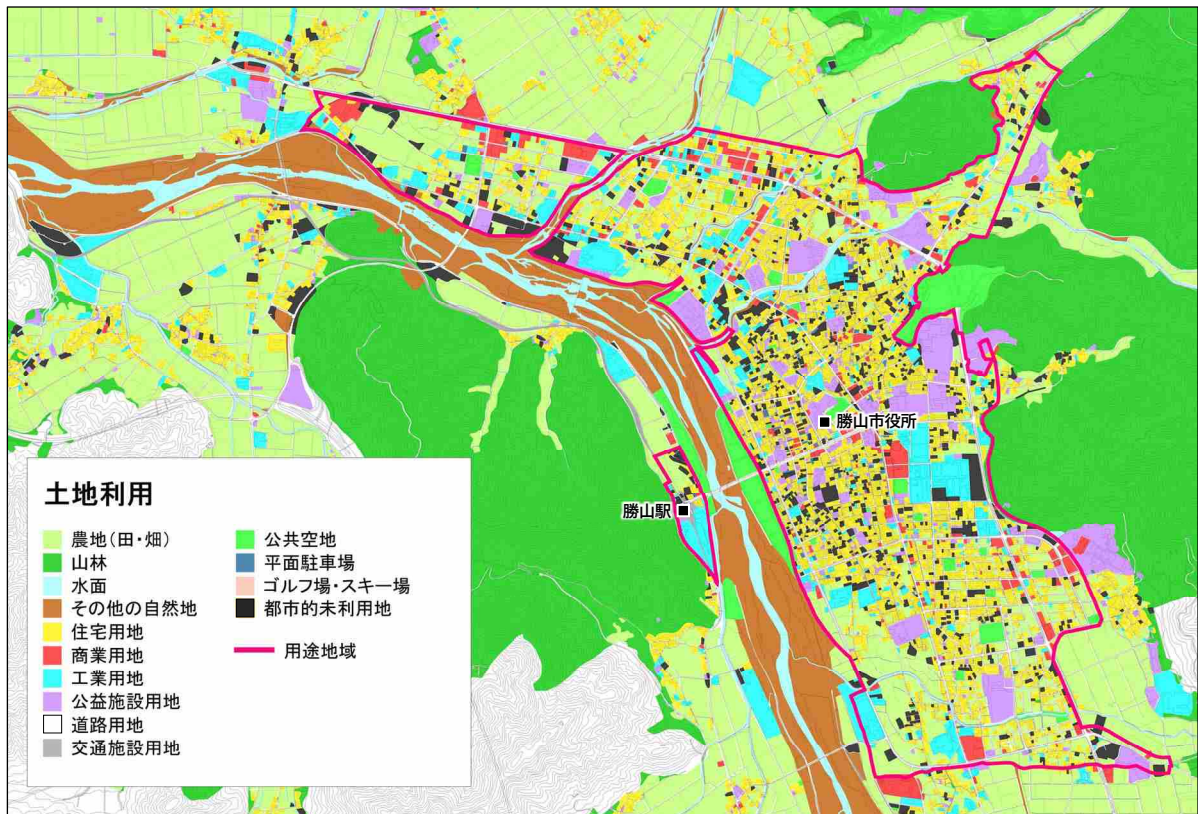


図 2-22 土地利用状況図

(資料：2021(令和3)年度都市計画基礎調査)

(2) 観光の動向

県立恐竜博物館のあるかつやま恐竜の森には、2019（平成 31）年には 120 万人を超える観光客が訪れており、スキージャンプ勝山や平泉寺白山神社は、年間 20～30 万人で推移していました。

いずれも 2020（令和 2）年以降は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う外出規制等の影響により、大幅な減少となりましたが、2022（令和 4）年には回復傾向が見られます。

一方、道の駅「恐竜渓谷かつやま」のある恐竜渓谷かつやまエリアには、コロナ禍のオープンにもかかわらず、年間 20 万～40 万人の観光客が訪れており、増加傾向が見られます。

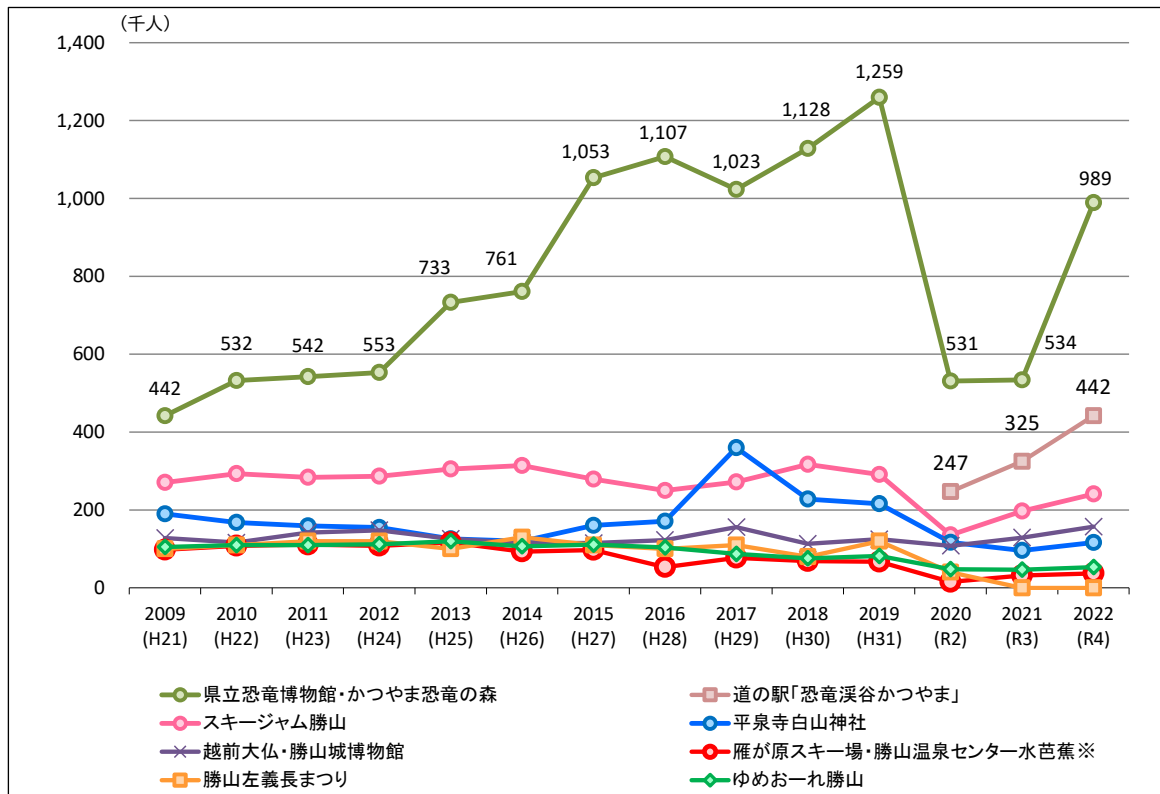


図 2-23 観光入込客数の推移（2009（平成 21）年～2022（令和 4）年）

（資料：福井県観光入込客数）

※雁が原スキー場は、2020（令和 2）年閉鎖のため、以降は勝山温泉センター水芭蕉のみの観光入込客数

<問題・課題>

○中心市街地の人口減少・少子高齢化により、今後さらなる商業施設の流出・撤退、空き地の増加など、空洞化が進むことが予想されます。

○かつやま恐竜の森や恐竜渓谷かつやまエリアには多くの観光客が訪れていますが、観光客の流れをまちなかに誘導できておらず、にぎわいの維持・活性化に寄与していない状態です。

2-6 災害リスクの顕在化

近年、全国各地で水災害の頻発化、激甚化による被害が多発しており、本市においても2022（令和4）年8月の大雨では、線状降水帯が発生し、24時間で約200mmの降水量を記録しました。

1000年に一度程度の想定最大規模降雨による洪水浸水想定では、住宅や都市機能が集積する用途地域内で、最大浸水深が3.0m以上になるエリアが見られ、九頭竜川や浄土寺川沿いには、河岸浸食により家屋が倒壊する恐れがある地域も見られます。

特に、中心市街地を縫うように流れる大蓮寺川は、流下能力が低く、過去に幾度となく浸水被害が発生したため、河川改修が進められました。河川改修工事は2016（平成28）年度に完了し、現在は市道地下に設置する元禄線放水路の工事が実施されています。

また、市街地に近接する山沿いの一部には、土砂災害警戒区域・特別警戒区域に指定されている地域が見られます。

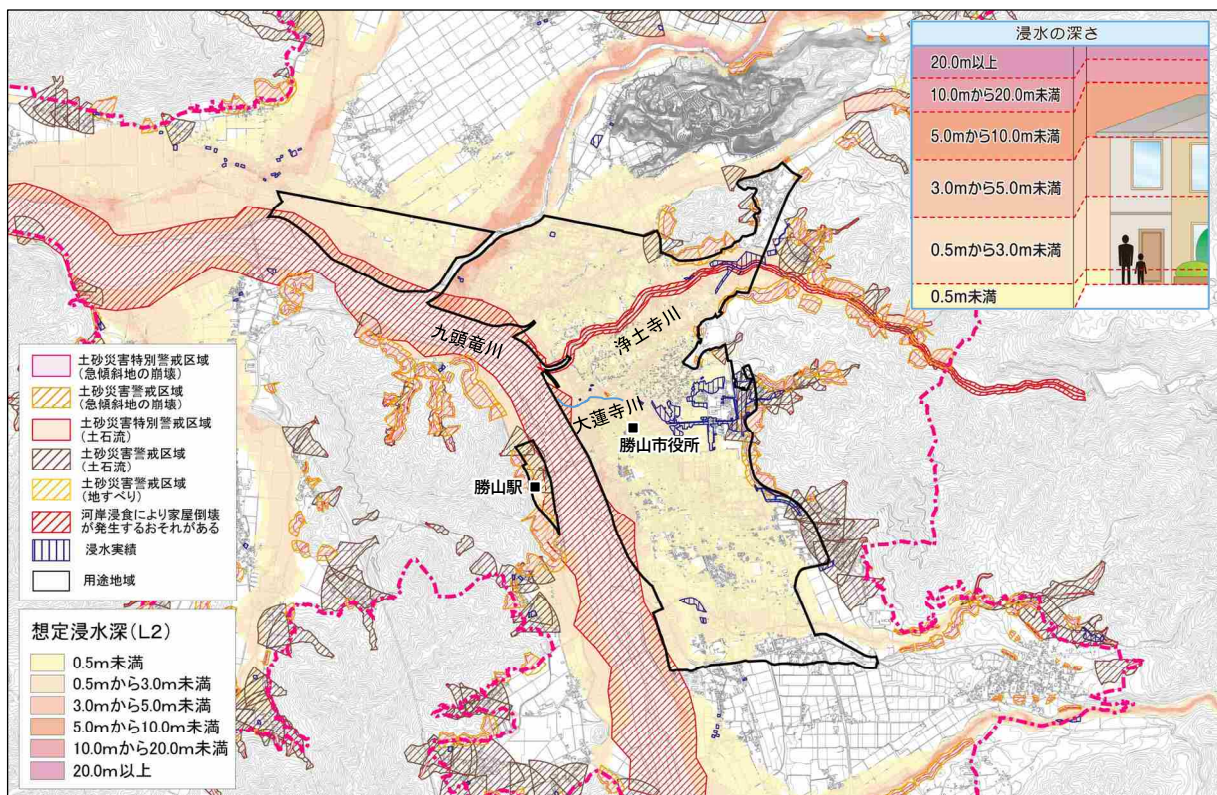


図 2-24 災害リスクの状況
（資料：2022（令和4）年版勝山市防災ハザードマップ）

<問題・課題>

- 1000年に一度程度の想定最大規模降雨等の災害に対しては、ハード整備だけで災害を防ぐことは困難であるため、災害時の被害を軽減するための取組が必要となります。
- 災害発生時には、一人ひとりの行動や地域住民が連携することが重要となりますが、人口減少による人口密度の低下や少子高齢化等により、地域の自助・共助の取組が難しくなります。

2-7 財政状況の逼迫

(1) 固定資産税・都市計画税の推移

固定資産税は、全体として減少が続いています。2021（令和3）年時点で11.37億円となっており、2010（平成22）年の85%の水準です。

都市計画税についても減少傾向が続いています。2021（令和3）年時点で1.28億円となっており、2010（平成22）年の70%の水準です。

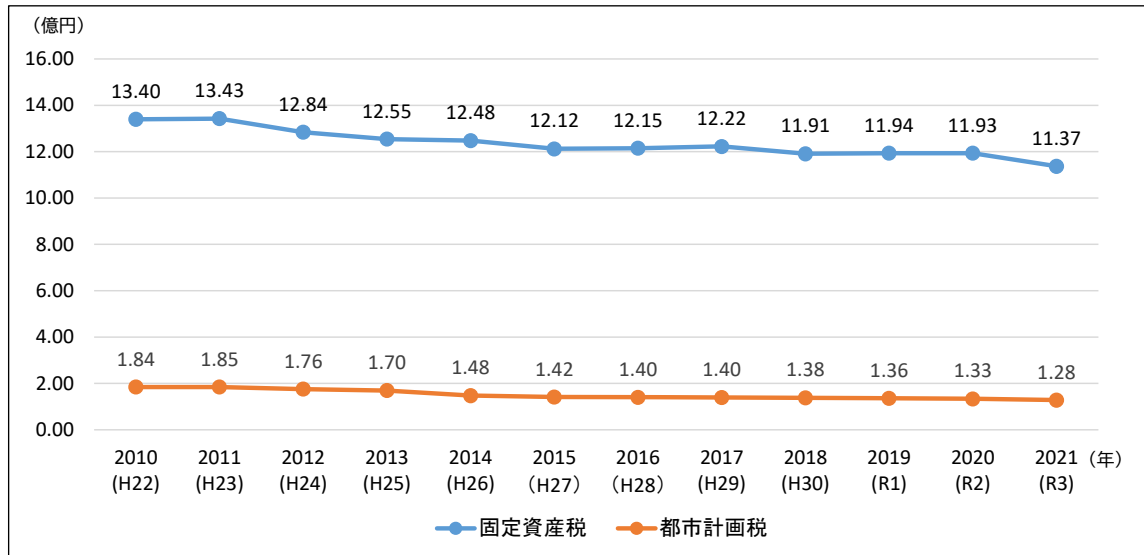


図 2-25 固定資産税・都市計画税の推移（2010（平成22）年～2021（令和3）年）
（資料：決算カード）

(2) 歳入、歳出の構造

自主財源は30億円台～40億円台で推移している一方、依存財源は70億円台～120億円台と幅があります。

自主財源比率は2010（平成22）年以降40%を下回る水準となっており、2021（令和3）年は27.0%です。

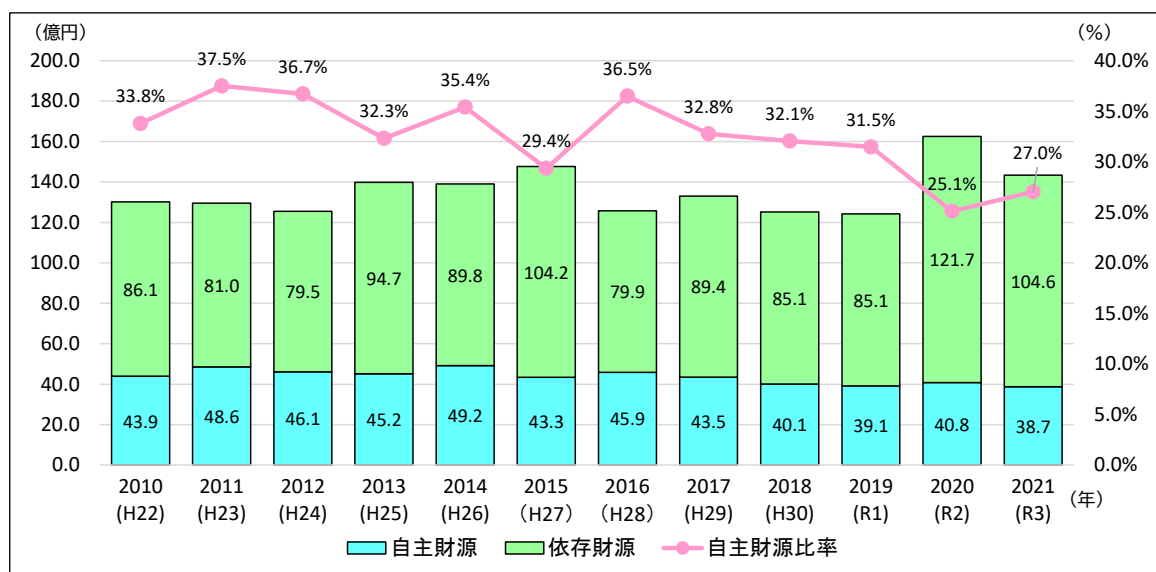


図 2-26 自主財源比率等の推移（2010（平成22）年～2021（令和3）年）
（資料：決算カード）

歳出を目的別に見ると、各種福祉関係に使われる民生費が最も大きく、また、経年的にも増加傾向にあり、2021（令和3）年は41.5億円となっています。

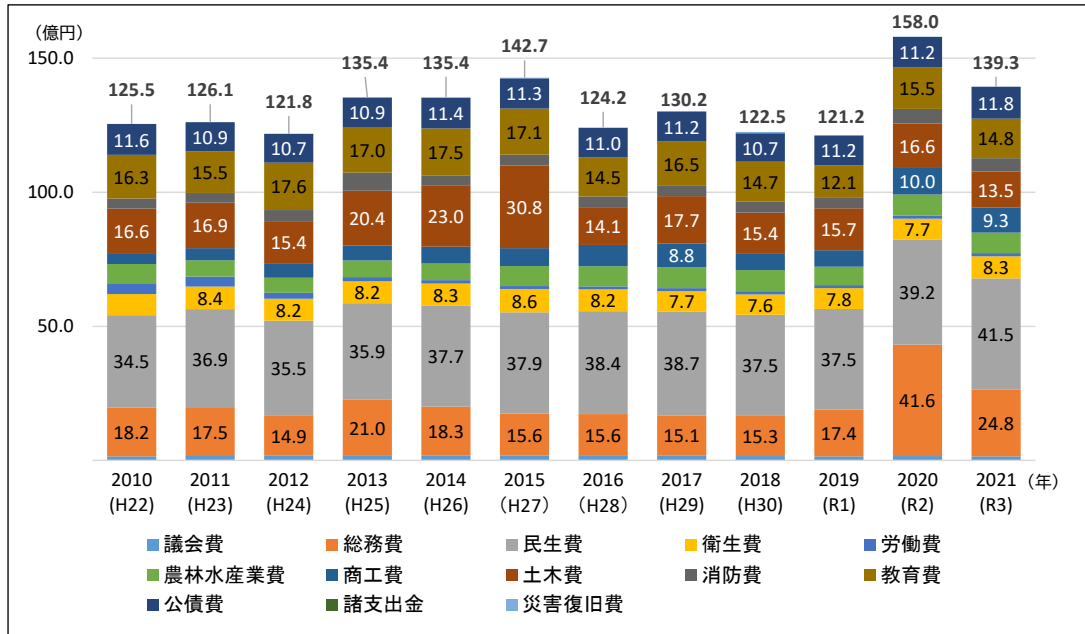


図 2-27 目的別歳出額の推移（2010（平成 22）年～2021（令和 3）年）
（資料：決算カード）

現在保有する公共施設とインフラ施設を将来においても同規模で維持し続ける前提で、必要となる更新等の費用について試算すると、年間約 26.4 億円（2016（平成 28）年～2055（令和 37）年の40年間）※が見込まれます。※勝山市公共施設等総合管理計画策定時（2016（平成 28）年 5月）

（「総務省公共施設等更新費用試算ソフト」による試算結果）

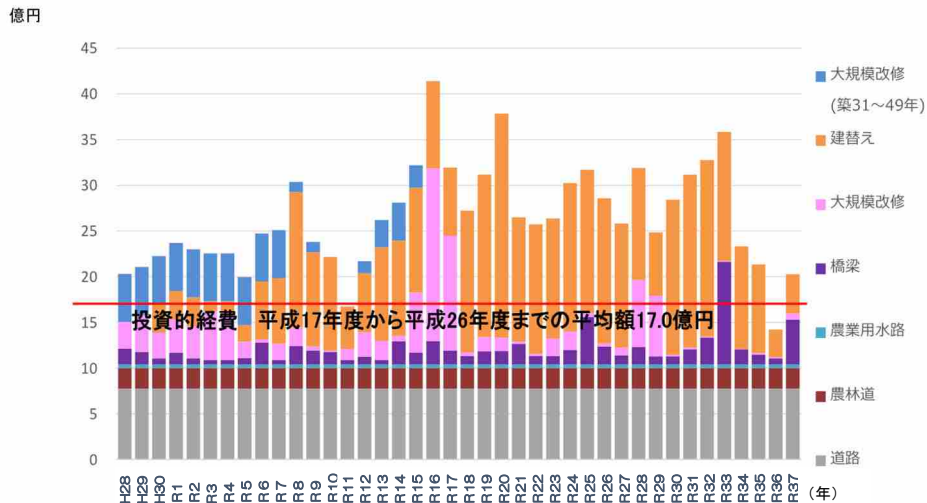


図 2-28 現状の公共施設の改修・更新に係る経費
（2016（平成 28）年～2055（令和 37）年）
（資料：勝山市公共施設等総合管理計画）

<問題・課題>

- 人口減少、少子高齢化によって、地方税とともに、依存財源である地方交付税も減少することが予想され、民生費や公共施設等の整備・維持管理費用の増加もあり、財政状況は緊迫の度合いを強めていくことが想定されています。
- 公共施設の改修・更新にかかる経費が、2005(平成 17)年度から 2014(平成 26)年度までの投資的経費の年平均額約 17.0 億円を大きく上回り、同規模で維持し続けることが難しくなります。

2-8 まちづくりの課題

本市の現状及び将来の見通し等を勘案し、まちづくりにおける課題を次のように整理します。

